

「水辺で乾杯 2016」開催報告

水循環・まちづくりグループ 佐治 史

1. はじめにー「水辺で乾杯」とは

7月7日といえば、皆さんは何を思い浮かべますか。五節句のひとつに数えられる七夕のほか、河川に詳しい方ならば、「川の日」を挙げる方も多いのではないのでしょうか。

この7月7日に、今後新たな風物詩が加わるかもしれません。その名は「水辺で乾杯」。平成27年度から国土交通省が提唱している社会実験で、普段見過ごしていた水辺の魅力に目を向け、粋に楽しもう、そのきっかけとして7月7日午後7時7分に、水辺に集まって乾杯しようという試みです。青い物を身につける、乾杯後は長居しないといった「水辺で乾杯アクション5カ条」を心得ておきさえすれば、何をどのように行うかは参加する個人やグループのアイデアに委ねられています。

2. 新川×リバーフロント研究所×「水辺で乾杯」

リバーフロント研究所が、昨年の永代橋に続き、乾杯場所に選んだのは、亀島橋（東京都中央区八丁堀2丁目）でした（図1）。

当研究所が立地する東京都中央区新川1丁目は、隅田川、日本橋川、亀島川に囲まれた地域で、別名霊岸島と呼ばれています。亀島橋は、亀島川を跨いで、霊岸島と京橋方面とを結んでいます。

「水辺で乾杯」当日は、18時50分に現地集合。それまでの時間は、自由行動とし、希望者向けに、本研究所代表理事の宮村忠氏の案内による「宮村先生と巡る新川」を開催しました。江戸への物資輸送の新航路を開いたことで知られる政商河村瑞賢（1618-1699）の屋敷跡をスタートし、新川大神宮、新川跡地を訪れる約1時間の行程でした。

新川は明暦の大火（1657年）の後に開削された運河で、酒・醤油・日常雑貨を取り扱う商人たちが集まり、なかでも下り酒（上方で生産され、江

戸に運ばれ消費される酒）を扱う酒蔵が立ち並ぶ江戸一番の酒市場であったこと、新川大神宮は酒問屋の神として信仰を集めてきたこと、新川は昭和23年に戦災灰燼処理の過程で埋め立てられたこと等、詳しいご説明をいただきました（写真1）。



写真1 新川大神宮にて

乾杯用のビール購入のために、何気なく立ち寄った酒店も、聞けば創業は明治時代。酒と深く関わってきた新川は、「水辺で乾杯」という新たな試みとも、非常に相性の良いまちかもしれません。午後7時7分、総勢22名の参加を得て、亀島川とスカイツリーを背景に乾杯しました（写真2）。



写真2 青で極めて乾杯

3. おわりにー今後に向けて

今年の「水辺で乾杯」は、全国335箇所、9,562人の参加者を数えました（ミズベリングHP）。去年に比べ、参加箇所は約2.7倍に増えています。どんな人やまちを巻き込みながら、この水辺での試みが育っていくのか、今後も目が離せません。

参考文献

- ・大成建設ギャラリー・タイセイ編「没後300年 記念河村瑞賢展ー日本の国土と海運を拓いた人ー」（1999年5月24日～8月20日）
- ・ミズベリングHP

<http://mizbering.jp/archives/20157>
（2016年9月6日最終閲覧）。



図1 乾杯場所